

自社農園からもお届けできるようになりました！

## 令和6年度産 葉とらずりんご販売開始

### 色より味に自信があります

赤系りんごの慣行栽培は、収穫前に葉摘みを行い、実の部分に十分な陽を当てることで赤く色づいていきます。葉とらずりんごは、その名の通り葉を摘まずに育てるりんごです。葉を残しておくことで光合成が盛んに行われ、糖度が増すとされています。イーサポートリンクが販売する葉とらずりんごは、全品種で糖度基準を設けており、基準をクリアしたものだけを出荷しています。葉形の色ムラが美味しさの理由です。



出荷前の葉とらずりんご

### 自社農園より《初出荷》

2024年4月、子会社である農地所有適格法人株式会社農業支援(青森県弘前市 / 代表取締役社長 工藤英紀)で、りんご農園の運営をスタートさせました。昨今の猛暑や豪雨といった天候の影響を受けながらも、無事本年度の収穫時期を迎えることができました。



りんご農園 (青森県弘前市笹館)

### 通年販売をめざして

イーサポートリンクでは、若い農業従事者を育成したり、高齢の生産者から農園を引き継ぐなど、地域を支える活動を行っています。農地を拡大し収量を増やすことができれば、通年販売が可能になります。青森県内だけでなく、日本の農業全体を元気にしたい。それが、私たちイーサポートリンクの目標です。



弘前センター(冷蔵庫外観)



弘前センターでの選果作業



冷蔵倉庫内の様子

## 生産者の負担を軽減、第二集荷場での受付を始めました！

イーサポートリンクでは、「岩木山麓葉とらずりんごの会」の生産者から集めた葉とらずりんごの販売をメインに行っています。主に弘前センター(青森県弘前市堅田神田)で入庫受付をしていますが、離れた地区の生産者を対象に、第二集荷場(青森県北津軽郡鶴田町)での受付を始めました。



入庫に訪れた生産者(左)とフォークリフトでそれを受け取る福田社員(右)

## 廃校舎が立派な倉庫に

イーサポートリンクでは、りんごの収量が増えるこの時期に、第二集荷場としてどこか利用できる施設がないか探していました。当社の契約生産者でもある企業からお話をいただき、廃校となった小学校の体育館施設をご提供いただけることになりました。繁忙期の間、第二集荷場として活躍しています。



第二集荷場外観

## 収穫作業に専念できる

自社農園のある笹館地区や鶴田町から弘前センターまでは、車で往復1時間以上かかります。それらの地域で農園を営む生産者にとって、朝から一日収穫作業をし、夕方1時間以上もかけてりんごを運ぶのは一苦労でした。第二集荷場を利用いただくことで、今まで移動にかかっていた時間を短縮でき、収穫作業に専念していただくことができます。



この日の入庫はトキ



入口の看板が目印



体育館へ延びるフォーク用スロープ



自作の鳥よけ(体育館入口)

## 受け取ったりんごバトン

「もう歳でね、手放そうかと思って……」知人の葉とらずりんご農家から相談を受けたのは2年前のこと。東京で販路の拡大に奔走していた工藤社長が、収量を増やすには自分たちでも作らなきゃダメだと考えていた矢先のことでした。工藤社長は弘前に戻り、相談を受けた農家から譲り受けた農園の手入れを始めました。その後、脱サラして農家になることを希望していた佐藤さんを「だったら、りんご農家から手伝ってみないか？」と招き入れ、現在は2ヘクタール余りのりんご農園を2人で切り盛りしています。渡されたりんごバトンは、しっかりと次世代へ繋がりました。



株式会社農業支援 工藤社長(左)と佐藤社員(右)

### 初めてで難しい部分もありますが、やりがいがあります。

「奥さん同士が友人だったのがきっかけで、工藤社長に声をかけていただきました」と話すのは新規就農者として昨年入社した佐藤貴秀社員。

「農業はまったくの未経験なので、戸惑うことも多いですが、丁寧に教えていただけるのと、何より“やりがい”があります」



収穫の様子

### 150年の歴史 青森りんご

西洋りんごが青森県にやって来たのは1875年のこと(青森県庁HPより)。「何代も続く農家さんもありますが、後継者不足で農園を手放す人も少なくありません。“青森りんご”ブランドの火を消さないよう、佐藤さんのような若い就農者を育てていくことが、我々世代の使命だと思っています」と、工藤社長は話してくれました。



農園内の小屋で山選果



### 《この記事に関する問合せ先》

#### イーサポートリンク株式会社

電話番号：03-6863-8523

メール：PR@e-supportlink.co.jp

担当：経営戦略部/広報 谷

